会員投稿

福岡県獣医師会の学校飼育動物への取り組み

處　愛美

1　私と学校飼育動物との関わり

(1)　校長先生からの電話

福岡県獣医師会が、どのように学校飼育動物に関わってきたかをご報告する前に、私自身がなぜ学校の動物たちと関わらざるを得なかったかについて、そこから話をはじめたいと思います。

十数年前のことです。町内のある小学校の校長先生から私の病院に電話がありました。

「どこか、ただで学校のウサギを診てくれる病院はありませんか・・・」

私は、とっさになんと答えていいのか、わかりませんでした。この校長先生は、私になにをいおうとして、なにを期待しているのだろう？

動物病院には、治療費はいくらくらいかかりますかという電話はよくかかってきます。診察しないとわかりませんとしかいえませんが、動物病院にかかったことのない人の不安な気持ちはわかります。けれども、ただでとはあまりにも・・・

とりあえず、私が引き受けることにしました。このような電話を他の人に押しつけるわけにはいかない、というのが正直な気持ちでした。ウサギを連れてこられた先生に話を聞き、そこで私は初めて、学校に動物はいるけれどそれを維持管理するための方策は、ソフト面でもハード面でも全く考えられていないことを知りました。校長先生の苦渋の電話も何となくわかりましたが、生き物がいれば病気だってするという当たり前のことがなぜ考えられていないのか、憤りは収まりませんでした。校長先生に、教育委員会に予算をつけるように話されてはいかがですかといったのですが、その後話された様子はありませんでした。

（1）　飼育担当の先生への質問

前述のようなことがあってから、ときどき近隣の小学校からウサギやチャボの飼育相談を受けるようになりました。娘たちが小学生になり、飼育当番になったことも相談件数の増加の要因だったと思います。ある時、私は飼育担当の先生に「何で学校で動物を飼ってるの？」と聞いてみました。ところが、その先生は言葉につまり、考え込んでしまったのです。たぶん、頭の中では命の大切さを学び、毎日続けて世話をすることで責任感を養うとか、友達と力を合わせて・・・いろんな答えが渦巻いていたのではないでしょうか。しかし、彼女は答えられなかった。飼育の現実とことばの差に、考え込むしかなかったのだと思います。ただ、私はそこで指導要領に書いてあることをすらすらと言われるより現実を前になにもいえなかった先生に好感がもてたし、先生方の力にならなければと思いました。

2　福岡県獣医師会の取り組み

(1)　「学校動物愛護モデル体験活動」

福岡県には約700の小学校（福岡市と北九州市はのぞく）があり、６つの教育事務所が管轄しています。

平成10年度、福岡県獣医師会と福岡県教育委員会義務教育課は、各教育事務所から２～３校のモデル校を選定して担当獣医師が指導をするという覚え書きを交わしました。平成12年度までの事業でした。

「エンジョイスクール推進事業」の一環としての「学校動物愛護モデル体験活動」の始まりでした。獣医師の主な仕事は、直接的な指導としてゲストティーチャーとしての指導、間接的な指導として飼育動物の病気やけがの処置、世話等についての相談に応じる、となっていましたが、当事者であるモデル校の先生も、担当獣医師もなにをしたら

いいかわからないというのが実情でした。担当獣医師の中では私だけが、モデル校になりますと手を挙げた、娘たちが通う小学校の校長先生から指名された獣医師でした。他の11校の先生と担当獣医師は、お互いの信頼関係をつくることからはじめなければならなかったのです。しかも1年ごとにモデル校も担当獣医師も変わります。しかし、獣医師の中には、私と同じように子供が通う小学校で飼育相談にのったりして学校の状況はだいたいわかっている人もいましたので、できるだけ学校や先生、子供たちに寄り添うように指導を進めていきました。中には「教育事務所から（モデル校になるように）いわれたら断れませんもんねぇ」と冷たくあしらわれた獣医師もいましたが・・・

(2)　「学校動物等調査研究活動」

前途多難な始まりだった県獣と県教委の取り組みも年を重ねるごとに少しずつではありますが広がりを見せてきました。平成13年度からは「学校飼育動物等調査研究活動」と名称が変わりました。これは「やるキッズ育成支援事業」の一環で、当初、児童が動物に関するテーマで調査研究活動をする場合には獣医師が支援することになっていましたが、研究テーマがなかなかあがってこなかったことと、今までモデル校になった学校の先生方から獣医師の飼育動物に対する支援、指導が評価されてきていたことなどから、名称は変わりましたがこれまでと同じやり方を継続することになりました。

「そばに獣医さんがいてくれると安心できる」「ウサギやチャボのことで知らなかったことがたくさんあることがわかった」「獣医さんがときどききてくれることで、子供たちが意欲的に飼育に取り組むようになった」

モデル校を経験した先生方の声です。

(3)　学校飼育動物専門委員会の発足

福岡県獣医師会としては平成10年度から取り組んできた学校飼育動物対策ですが、支援、指導の形は個々の獣医師に委ねられ、獣医師会としての基本姿勢、組織としての支援のあり方については検討されていませんでした。そこで、平成14年度、理事会で専門委員会の設置が決まりました。

委員会では平成15年8月に獣医師会会員にアンケートを実施して、学校飼育動物に実際どれくらいの獣医師会会員が関わっているのか調査しました。

本会小動物部会会員250名中128名（51,2%）、関係行政機関33組中26組（78,8%）から回答があり、保育園や、小学校から飼育動物の診療や相談を受けたことがあると答えたのは105名でした。一人で複数の学校から依頼されている獣医師もいますので、モデル校の担当獣医師以外にも多くの獣医師が飼育動物に関わっていることになります。診療費については、正規料金での診療は12%で、無料57%、あとは実費での診療でした。そのうち学校やクラス、ＰＴＡからの予算で支払われたのは20%にとどまっています。後は、担当の先生や校長、教頭先生のポケットマネー、職員室でのカンパなどでまかなわれていることがわかりました。

獣医師としての意見を問うたところ、診療費については、予算化すべきであるという意見が非常に多く寄せられました。飼育の状況については、診療以前の問題、飼育がまともになされていない学校があるといった厳しい意見もありました。意見として多かったのは、学校や教師に対して（無関心な教師が多いというのもありました）、適正な飼育法を伝えるなどです。獣医師の多くは、まず児童を指導する教師に伝えなければ、飼育動物の置かれている状況の改善はなされないと認識している結果でした。

(4)　「学校における望ましい動物飼育のあり方」に関する研修会

獣医師会員のアンケートの結果にふまえて、平成16年8月25日、福岡県獣医師会と福岡県教育

委員会の共催で教員と獣医師、動物愛護推進員を対象に研修会を開催しました。

初めの計画では、獣医師会主催の講演会にぜひ教員も参加していただきたいということで、教育委員会に協力要請にいったのですが、私たちの開催主旨を理解していただき、共催で教員の研修に組み入れることになりました。

講師は、文部科学省から教科調査官、日置光久先生、本研究会の代表発起人、中川美穂子先生にお願いしました。

参加人数は、約250名、教員の参加は、校長、教頭、教育委員会からの参加も含めて約145名でした。そのうち125名の方がアンケートに答えてくださいましたので報告します。文末に集計結果を出しています。今まで診療につれてこられた飼育動物を通して、漠然としかわかっていなかった福岡県下の飼育動物の実態がわかります。だいたいは私たちの予想と大きな開きはないといったところでしょうか。他の地域で中川先生が行われた調査と同じく、長期休暇中の飼育や、過剰繁殖が問題となっています。

感想もずいぶんたくさんの先生が書いてくださいました。一部をご紹介します。

『大変役立ちました。市内の校長会にも報告し、これからの動物介在教育にたずさわりたい！ありがとうございました。』

『日置光久先生のお話は、あたたかい口調で心に残るものがありました。私は、国語専門で理科から遠のいていましたが、何だかやる気がでてきました。子供たちに、心ゆれ動く感動体験を経験させていきたいと思いました。中川美穂子先生のお話は感動でした。本や資料の中では存じあげていましたが、動物を愛するという気持ちを強くしました。土、日や長期休暇にもかかわっています。しかし、私ひとりで日常も病気のこととかもろもろかかわっていくのに表にも書いていますように、学校飼育動物がたくさんいるため正直いって大変です。うさぎ小屋には、うこっけいやにわとりがいる状況です。さっそく居室をつくろうと思います。私は、できることはしていこうと思います。「あー、今日もよいウンチをしているなあ」と言えるように・・。がんばります。』

『中川先生の話から動物飼育の大切さを改めて感じることができた。特にハムスターを教室内飼育していたクラスの児童の絵や文章が、月々に変わっていくのにはおどろいた。愛情をかけることのすばらしさが表れていた。また、３、４年生の学年飼育という考え方に、今まで自分の中にあった、「飼育委員会の仕事」という概念が固まったものであることが分かった。自分の学校でも検討してみたい。鳥インフルエンザの件でも、学校から保護者に冷静に啓もうしていくことが必要だと思った。』

『ほんのちょっと知識と愛情があれば、子供の教育にとても大きな貢献をすることが理解できた。ウサギは、ほんとはこんなところで生きているんだよと（野原の写真）が、大きなインパクトを子供たちに与えると思った。いつか使ってみたい。我が家でも、犬２匹、猫１匹、ウコッケイ２羽、飼っているが、旅行にもつれていくと、どこでも必ず人が話しかけてくるので、よいコミュニケーションになっている。教育効果バツグンは理解できる。元来、猫はきらいなつもりだったが、飼ってみると好きになった。めったに獣医師の方にお話をきけないので貴重な時間だった。地域でも獣医師さん方と学校とのネットワークが広がればよいと感じた。』

『中川先生の講話について、「動物は使いよう」という言葉が一番印象に残りました。「飼育教育の方法」は、すこぶる納得のいく内容であった。「飼育には『継続』することが第１である。」ことがよくわかった。獣医師会との連携の必要性を実感しました。このような研修会は、全職員、一度は参会すべきであると感じました。大牟田市には、獣医師会はあるのでしょうか。(そういうことすら知りませんでした。)』

『学校教育と体験学習について、理科の学習で何を育てていこうとしているのか、自然と科学を結ぶために体験学習が大切であるということ等、飼育学習との関連がよく分かった。講話２について、動物を飼うことの意義や飼育の仕方、子どもの関わり方等、とてもよく分かるお話でした。飼育舎の見直しをし、今後の飼育の在り方を考えるよい機会になった。鳥インフルエンザに対する対応の仕方等、大変役に立ちました。ふんのよしあしが発見できる子どもを育てる飼育の在り方を目指していきたいと思います。』

３　福岡県における獣医師会と教育委員会の今後の連携について

(1)　研修会の今後のあり方

研修会を開催するに当たり、担当指導主事とし